

装飾古墳の民俗学

Folklore of the Kofun Period Decorated Tombs

橋本裕之

- ①装飾古墳における想像力
- ②民俗的想像力における装飾古墳
- ③装飾古墳にまつわる伝承
- ④装飾古墳の受容史

【論文要旨】

本稿は後世の人々が古墳をいかなるものとして解釈してきたのかという関心に立脚しながら、装飾古墳にまつわる各種の伝承をとりあげることによって、装飾古墳における民俗的想像力の性質に接近するものである。そもそも古墳は築造年代をすぎても、その存在理由を更新しながら生き続けるものであると考えられる。古墳は多くのばあい、今日でも地域社会における多種多様な信仰の対象として存在しているのである。といっても、こうした位相に対する関心は考古学の領域にとって、あくまでも周辺的かつ副次的なものであった。

だが、後世の人々が付与した意味、つまり土着の解釈学を無知蒙昧な妄信にすぎないとして、その存在理由を否定してしまうことはできない。それは古墳にまつわる民俗的想像力の性質に接近する手がかりを隠しており、古墳の民俗学とでもいうべき未発の課題にかかわっている。とりわけ特異な図文や彩色を持つ装飾古墳は、その存在が古くから知られているばあい、民俗的想像力を触発するきわめて有力かつ魅力的な媒体であったらしい。本稿はそのような過程の実際をしのばせる事例として、虎塚古墳・船玉古墳・王塚古墳・重定古墳・珍敷塚古墳・石人山古墳・長岩横穴墓群（108号横穴墓）・チブサン古墳などにまつわる各種の伝承をとりあげ、民俗的想像力における装飾古墳の場所を定位する。こうした事例は考古学における主要な関心に比較して、あまりにも末梢的なものとして映るかもしれないが、現代社会における装飾古墳の場所を再考して、装飾古墳の築造年代以降をも射程に収めた文化財保護の理念と実践を構想するための恰好の手がかりを提供している。地域社会における装飾古墳の受容史を前提した装飾古墳の民俗学は、そのような試みを実現するためにも必要不可欠であると思われるのである。

①……………装飾古墳における想像力

筆者は国立歴史民俗博物館の開館10周年記念企画展示「装飾古墳の世界」に関する展示プロジェクト委員の1人として、大勢の考古学者らとともに平成3年（1991）3月に福岡県と熊本県の装飾古墳、同年12月に福島県と茨城県の装飾古墳を見学する機会に恵まれた。それは最も多数の装飾古墳を見た民俗学者という栄誉を未来永劫にわたって獲得したことを確信させる稀有な体験であり、後日もJR人吉駅裏に位置する大村横穴群を見学するべく（？）熊本県人吉市に単身出かけたくらい筆者を熱中させた。だが、そのような眼福を授けられながらも、唯一の民俗学者として現地調査に参加した筆者の関心は装飾古墳じたいよりも、装飾古墳における想像力の性質に向けられた。装飾古墳の図文や彩色が放つ圧倒的な迫力に対峙した人々は、いったい何を感じたのだろうか。日本精神史と日本文学の食欲な探求者である平野仁啓は古代日本人の想像力の性質に肉薄した論考において、装飾古墳の「原始絵画」における想像力が呪術と関連していることを指摘した上で、こう述べている。

死者の靈魂が大きな問題になってくるとすれば、古墳の壁画において、人間が主役として登場しなければならないだろう。ところで、多くの古墳の壁画にはさまざまな文様が描かれているのであって、必ずしも人間が主役を演じているわけではない。また、たとい人間が描かれているにしても、竹原古墳の馬の手綱をひいている人間の絵のようなものは珍しいのであって、ほとんど日常生活は描かれていない。さらに、人間の描き方にしても、写実性が乏しく、その点はほかのものの形象を描く場合も同じであって、古墳の壁画は、前代の銅鐸と変りはないほど稚拙である⁽¹⁾。

だが、平野はその理由を画家の手腕に帰することができないという。そして、「古代日本人の描いた原始絵画の写実性の乏しさ」が「写実性の乏しさという言い方よりも、想像力のよびおこす像の不明瞭さと言うべきであ」り、「そこには古代日本人の想像力の活動の貧弱さが露出している⁽²⁾」としている。以下の所説は古墳時代に関する考古学の成果に対応するものか否かよく知らないが、一考すべき価値を備えているだろう。

想像力が志向する対象が漠然としていたのであり、むしろ想像力が強烈に働く必要をあまり感じなかったのである。古墳のごとき巨大な土木工事を遂行するまでに発達した知性は、人間についての想像力の活動に充分に参加していないのであった。社会と人間についての意識の未発達がある。そして、ここでわたくしは、古墳文化における古代日本人の想像力をはぐくんだその時代の政治権力が、弥生文化の時代に比べて、大きな成長と変貌が見られるにもかかわらず、ファラオの王権とは全く規模の違ったささやかなものでしかなかったことを考えるのである⁽³⁾。

平野は想像力の性質を写実性に引きつけて理解している。そして、写実性が自然に対峙する／せざるを得ない社会的条件に由来しており、その欠如は「古代日本の共同体社会は、充分に人間の社会として形成されることなく、自然に包みこまれていた⁽⁴⁾」、つまり古墳文化における古代日本人が依然として自然的条件に拘束されながら存在していたため、現実の自然を操作／変形する対象とし

て認識していなかったことをしめしているというのである。

だが、写実性の欠如は必ずしも想像力の欠如を意味しない。平野じしんも述べているように、「想像力に関する意欲や知性の性質は、生産様式や社会組織や神観や人間観などに不可分にむすびついている」のであり、「それらのものが変化するならば、想像力を働かせる意欲も変化せざるを得ないし、想像力に参加する知性の性質も変化する」と考えられる。すなわち、「それぞれの時代には、それぞれ独自の想像力の活動が見出される⁽⁵⁾」といえるだろう。たとえ古墳文化における古代日本人が自然や自然に対峙する人間を十分対象化していなかったとしても、そのような社会的条件は独自の想像力を生み出したはずである。

それは自然を操作／変形することよりも、自然が持つ強度を生き、自然の諸相を直接つかみとり浮上させることに長けた想像力であったのかもしれない。その結晶こそが福岡県嘉穂郡桂川町の王塚古墳などに代表される抽象的かつ幾何学的な図文であったとしたら、それは自然が持つ強度じたいを純粋な形態としてあらわしたものであり、まったく異なる写実性を志向していたとすらいえるはずである。中沢新一はハイデッガーの技術論に導かれながら、さまざまな職人が駆使する技術について「自然のなかにかくれ、眠っているが、自分自身の力ではけっしてこの世界にあらわれでてこようとはしないものを、むしろ積極的に誘い出し、露わなものとするようなやりかたで、ピュシス（自然）にかかわろうとしている⁽⁶⁾」（括弧引用者）という。こうした哲学的考察は装飾古墳における抽象的かつ幾何学的な図文を生み出した想像力の性質に接近するさいにも、きわめて有益であると思われる。

ところで、山折哲雄は福岡県鞍手郡若宮町竹原の竹原古墳をとりあげながら、「それは死者たちの住む暗うつな地下世界をあらわすというよりは、まさに生を表現する堅固な光の家というイメージを私の内に喚起した⁽⁷⁾」と述べている。山折の所説は個人的な感想を書きつけただけであるようにも感じられるが、必ずしも極私的な印象批評に終始していない。筆者じしんも山折がいうとおり、「装飾古墳も、外部から眺めるのではなく、内部からのイマジネーションをはたらかせるとき、まったく異なった世界をわれわれの前にかいまみせるのではないだろうか⁽⁸⁾」と考えている。じっさい、前述した仮説にしても筆者がそのような想像力を働かせてみた結果の一端をしめたものであった。そして、平野も先史時代の洞窟壁画における想像力について「呪術を行なうために入って行った洞窟の暗黒は、現実を遮断して、想像力の強烈な活動を生じさせるすぐれた条件であったに相違ない⁽⁹⁾」といい、洞窟のような死の世界がむしろ生の世界に関する想像力を最も強く喚起する契機として作用することを示唆していたのである。

だが、これ以上くわしく平野や中沢、そして山折の哲学的考察を参照する必要はないだろう。装飾古墳における想像力の性質について、前述した仮説を具体的に検証しようとしても、古墳文化における古代日本人が提供する手がかりはあまりにも乏しく、あらかじめ失われているとすらいえるからである。また考古学者にしても、くわしい実地調査を前提しているのはもちろんであるが、装飾古墳の図文や彩色を解釈する試みはどちらかといえば推理や憶測とでもいうべきものに近く、必ずしも実証的な根拠を提出することに成功していないと思われる。筆者は以前もこうした現状について、「考古学者や民俗的想像力の饒舌に比較したとき、その特異な文様や彩色は今日でもあまりにも寡黙な⁽¹⁰⁾のである」と書いたことがある。

したがって本稿は、以降むしろ民俗的想像力の饒舌に依拠しながら論述していきたい。もちろん基本的な関心は装飾古墳における想像力の性質であるが、その対象と方法は大きく変化する。すなわち、本稿は装飾古墳にまつわる各種の伝承をとりあげることによって、装飾古墳における民俗的想像力の性質に接近してみようというのである。そのためにも最初に民俗的想像力における装飾古墳の場所を定位しておきたい。

②……………民俗的想像力における装飾古墳

そもそも古墳は築造年代をすぎても、その存在理由を更新しながら生き続けるものであると考えられる。たとえば、神社や小祠が古墳の真上もしくは周辺に建っている光景は各地で見ることができる。古墳にまつわる各種の伝承もきわめて多い。古墳は多くのばあい、今日でも地域社会における多種多様な信仰の対象として存在しているのである。といっても、こうした位相に対する関心は考古学の領域にとって、あくまでも周辺のかつ副次的なものであり、いわゆる余談の範囲を出ていないと思われる。

もちろんかつては考古学においても、後世の人々が古墳をどう解釈してきたのかという関心の重要性を強調する試みが存在していた。たとえば、初期の日本考古学を代表する1人であった清野謙次は「古墳と迷信」という関心に沿って、「古墳から仏像の発見」と「古墳と伝説、怪異等」の事例をあげている。とりわけ後者は黄金鶏・発掘品の神秘化・古墳の怪異・古墳発掘品の使用忌避・授福・祭祀・火雨伝説という7つの項目にわたっており、文字どおり古墳の民俗学を構想するものであった。清野は「⁽¹¹⁾陵墓は日本人の信仰の対象であつて、神社の所在地は妻々陵墓の存在地であり、⁽¹²⁾同時に又迷信、口碑、伝説は種々の形式に於て古墳墓にからみ附く」と述べた上で、こう続けている。

かくの如き次第であるから、日本人の精神生活と古墳墓との関係を探究する場合には、其処に広大なる研究範囲があり、数多の文献がある。そして之は同時に又民俗学上の問題であり、民俗学史の興味豊かな部分でもある。⁽¹³⁾

清野は「之を細説すると長篇に失するので、唯心附いたる二三の事項を記述して、余は他日の機会に譲ることとす」⁽¹⁴⁾と述べているが、それでも古墳の民俗学が民俗学のみならず考古学にとってもきわめて重要な領域であり、大きく展開する可能性を持っていることを十二分に感じさせる。また、斎藤忠は江戸時代の地誌や随筆などを博搜して古代遺跡に関する記事を検出しており、古墳についても膨大な記事を整理分類している。その内容は古墳にまつわる各種の伝承を数多く含み、古墳が近世の地域社会においていかなるものとして解釈されていたのかを具体的に提示しているから、古墳の民俗学にとっても最も基本的な文献として益するところがきわめて大きい。⁽¹⁵⁾

一方、神道考古学を提唱した大場磐雄は墳墓を対象とする神社の諸例を検討した上で、その祭祀について墓前祭祀（原始神道期）・氏神祭祀（原始神道期）・御廟信仰（王朝時代）・怨霊畏敬（王朝時代中世期以降）・偉霊欽仰（近世）の5期を想定することができると述べた。⁽¹⁶⁾大場の主要な関心はあくまでも上代における墳墓と神社の関係であったが、これも後世の人々が古墳をいかなるものとして解釈していたのかという課題を追求した試みの1つに数えることができるだろう。大場は

後年にも古墳や類似した石造物にまつわる各種の伝説や説話をとりあげた成果を発表しており、その基本的な視座をしめしている。

石造物に一種の神秘的な説話が伴うことは、おそらく近年に至って発生した伝説ではなく、また何人かによって故意に植えつけられた説話でもないであろうと思う。むしろ古代にさかのぼる程、人の心が純真さを増し、ただちに超自然的な力の存在を想わしめたであろうから、かかる観察の源流が上代人の思想の中に根ざして、それが種々普湮化し、説話化したと見ることができるように思われるのである。⁽¹⁷⁾

こうした所説は「わが国上代の巨石文化の中には、固有の信仰や思想が多分に織込まれており、それが後世一つの伝説または俗信として今に伝えられている点に注意すべきであろう⁽¹⁸⁾」という結論が端的にしめしているとおり、あくまでも現代の伝承が上代の信仰や思想に接近するための重要な手がかりであるという基本的な前提に立脚している。筆者は必ずしもこうした前提を共有していないため、その当否を判断することができないが、いずれにしても古墳にまつわる伝承を考古学の領域に導入した先駆的な試みとして重要である。何よりも「その説話は単なる昔話のみとして聞き流すことができないような気がしてならないのである」と述べて、「ゆえにしばらく考古学者の衣服を脱いで、畑違いのフォークロアに身を没入して、少し発掘して見たいと思う⁽¹⁹⁾」という大場の意欲的な姿勢をこそ評価しておきたい。

だが、とりわけ近年の考古学は社会的もしくは文化的な諸現象全般について、そのような諸現象が成立した時期に関する主題群に集中しており、成立した時期以降に関する主題群を等閑視してしまいがちである。かつて柳田國男は大和地方や河内地方の事例に触発されながら、「之を見て感じたことであるが、古墳を重要なものと見て、之に注意を払う考古学者の一派に、古墳が築かれてから今日に至る迄の、民俗上の変化を無視した研究の仕方をして居るものがありはしないかと思ふ⁽²⁰⁾」と述べて、古墳が成立した時期を絶対視する考古学の偏向に対して警鐘を鳴らした。また、芳賀登は古代の地域社会における古墳という視座を提出して、いわば古墳の地方史を解明する必要性を強調している。

われわれは、したがって古墳というような帝王その他の権威を示すものが、生活とのかかわりのないかたちで成立したものでないことを知らねばならない。その古墳そのものが、地域住民の生活を左右するものであったし、生活を保障するものとしてかかわっていること、権力が権力自体として成立しているのではなく、地域住民の生活の中に成立していること、そうしたものとして復原することが地方史である。しかるに、いままでの古墳の研究は考古学の遺跡としてのみ検討され、大土木工事が用水灌漑とどうつながり、地域住民のなりわいにどのような影響を与え、それがまた地域住民の生活とどうかかわっていたかが調べられるべきではなかった⁽²¹⁾だろうか。

芳賀の所説じたいは古墳の築造年代に関するものであったが、もちろん築造年代以降にも適応することができる。古墳は後世においてもやはり「地域住民の生活の中に成立している」のであり、「地域住民のなりわいにどのような影響を与え、それがまた地域住民の生活とどうかかわっていたか」を問うことが要請されている。にもかかわらず、地域社会における古墳の受容史を解明する必要性を強調した柳田や芳賀の挑発的かつ威嚇的な提言は、考古学の領域において少数の例外を除け

ば、今日でも十分汲みあげられていないといわざるを得ないのである。⁽²²⁾

以上のような事態は装飾古墳の考古学においていっそう顕著である。装飾古墳の図文や彩色が放つ圧倒的な迫力に引きずられてしまうのだろうか、その大半は装飾古墳の築造年代を想定した主題群に集中しており、築造年代以降を想定した主題群を等閑視してしまいがちであった。前述した地域社会における装飾古墳の受容史はその1つであろう。特異な図文や彩色についても、装飾古墳が築造された社会的もしくは文化的な背景に遡及して「隠された意味」を解明する試みがさかんに行なわれている一方、後世の人々が付与した意味、いわば土着の解釈学を解明する試みはほぼ存在しなかったといってもいい。⁽²³⁾ いずれにしても築造年代以降、つまり後世の所産でしかないのだから当然の話であろうが、装飾古墳の考古学に関する近年の水準をしめしている『装飾古墳の世界 図録』⁽²⁴⁾は、良くも悪くもその典型であるということが出来るはずである。⁽²⁵⁾

だが、こうした土着の解釈学を無知蒙昧な妄信にすぎないとして、その存在理由を否定してしまうことはできない。それは装飾古墳における民俗的想像力の性質に接近する手がかりを隠しているのである。築造年代以降、後世の人々は古墳をいかなるものとして解釈してきたのだろうか。とりわけ特異な図文や彩色を持つ装飾古墳は、その存在が古くから知られているばあい、民俗的想像力を触発するきわめて有力かつ魅力的な媒体であつたらしい。こうした関心は古代日本人の想像力を解明する手がかりを提供する可能性こそ僅少であろうが、一方で装飾古墳の民俗学とでもいうべき未発の課題にかかわっている。そして、その手がかりは今日でも少なからず残されているのである。以下、そのような過程の実際をしのばせる事例をいくつか検討していきたい。

③……………装飾古墳にまつわる伝承

(1) 茨城県勝田市中根の虎塚古墳

連続三角文・環状文・円文・轆・轆・鐙などのさまざまな図文が、横穴式石室の玄門・奥壁・東壁・西壁に赤1色で描かれている。虎塚古墳に関する最初の記録は文化4年(1807)にその大半が完成した小宮山楓軒の『水府志料』である。同書は十郎岩屋について「やへさきと云所にあり。岩穴十三四あり。口三尺にして、内七八尺四方あるなり。或は口二ツありて、内一丈三四尺四方に及べるあり。昔曾我五郎、十郎火の雨を避てかくれし所なりと申伝ふ。其上の山にとらカ塚といふ有り。此辺岩穴惣計すれば七十余に及ぶ。梵字杯彫りたるもあり。おそらくは曾我五郎、十郎にはあるべからず。上古穴居の跡歟、或は古墳の類ならん歟」としているから、当時も「とらカ塚」という呼称が存在していたことを知ることができる。

以降も数多くの人々が調査したらしいことは墳丘上の盗掘坑によってもしのばれるが、図文や彩色の存在が知られていたかどうかはよくわからない。この古墳について地主であった西野家は先祖代々けっして掘るべからずと言いつづけていた。⁽²⁶⁾ 虎塚という名称の由来は以下のとおり。前者は西野茂信氏が語ったもの、後者は現地に残っている伝説として紹介されたものである。

近くに十五郎穴ちゅうのがあって、昔、十五郎穴に、曾我の十五郎という人が、鎌倉さんなんかに追われて、まあ、きて、あそこを隠れ屋にして隠れたんだと。そんどきに虎御前という人がたずねてきたんで、その最後には、虎御前ちゅうのを、ここの塚さのめたんだと。⁽²⁷⁾

蘇我兄弟（十郎，五郎）が富士山麓で仇討ちをした後，この地まで逃れてきて，虎塚古墳の東側崖にある十五郎穴（墓）に隠れ住んでいた。その消息を知った十郎の妻である虎御前がここを訪ねたが，病で亡くなったため，大きな塚を築いて墓としたので虎塚と名づけられた。⁽²⁸⁾

こうした伝説は虎塚という名称の由来に言及したものであるが，図文や彩色によって触発されたものであるとも思われない。曾我兄弟と虎御前の伝説がこの古墳に付会された経緯は知る由もないが，⁽²⁹⁾もしも図文や彩色の存在が早くから知られていたとしたら，図文や彩色に関する何らかの伝承が存在してもおかしくないだろう。つまり虎塚古墳じたいは知られていても，その図文や彩色は知られていなかったと考えられるだろうか。少なくとも主要な関心事として扱われることはなかったといえそうである。なお，近年は虎塚古墳を観光資源として利用する試みも活発化しており，壁画の発見を記念して「虎塚壁画」という菓子（フランス風せんべい）も売り出されている。

（２）茨城県真壁郡関城町船玉の船玉古墳

横穴式石室の壁面はほぼ全体に赤・白の顔料が遺存しており，靱・靱などの図文が描かれている。江戸時代から開口しているから，その図文や彩色の存在も早くから知られていたはずである。だが，船玉古墳にまつわる伝承は図文や彩色に触発されたというよりも，埋葬物に関するものであった。すなわち，碗貸伝説である。⁽³⁰⁾鳥居龍蔵はこの古墳が古くから隠里もしくは碗貸岩屋とも称されていたことを報告して，船玉村に伝わる「隠里の膳碗由来」という元禄４年（1691）の記録を紹介している。⁽³¹⁾

抑もかくれ里の膳碗と申すは船玉町八幡の社に今以て岩谷あり。入口はさほどにあらざれども内に入りて奥十丈をしくとも云ふべし。其先へゆく程せまくして下る岩あなあり。小石をほそき縄にむすび落し見るに鳴音してその落る事限りなし，むかし此岩屋の口に願ひて入用のまひ日膳わん何人まひ御かし被下といひける時は，翌朝取り揃ひ岩の上に出しありしとかや。こゝにどんよくのもの有てかの膳碗をかりて月日たつといふともかへさず。それより夜なよなをもてに聲あつて，膳わんかへせ〜とよぶこゑきこへけれども，返す事なかりければ，しだひに家内おとろいしまひけるゆへその親類のもの恐れをなして當寺に納めしより今什寶となりぬ。又かくれざとは享保の始め雨の夜うしみつ頃四五人ひふし能麥つくおときこゆ。いつれにつくやと明る日を隣をかにたのしむしなれど重ての此の音をしるべにたづね來れば，かの岩屋の内なるとかや。今もたま〜をとあつて，此をとを聞くものは，福貴はん昌すといひけり。まことに宇賀のみたま，⁽³²⁾くらないたまの神れいなるべし。

この記録は船玉古墳が元禄４年以前に発掘されていたこと，そして碗貸伝説すら付会されていたことをしめしている。鳥居は「殊にすでに元禄のはじめに於いてこれが斯くまで信仰などと結び附いて居るのを見ると，その発掘の決して近い時でないことが考へらるゝ」のみならず，「殊におかしいのは，以上の碗貸伝説が，これが実際の碗が造られ，これを貸借する風習すら起つて来た位である」と述べている。鳥居はこの碗貸伝説について「所謂「偽から出た誠」でフオルクロアからエスノグラフィーに移つて来た有様が面白く見られる」⁽³³⁾といているが，もしかしたら実際に埋葬物が持ち出されて村人の利用に供されたことがあったのかもしれない。そう考えれば，碗貸伝説がそもそも船玉古墳の埋葬物にまつわって生成した伝承であった可能性も指摘することができるだろう。

一方、図文や彩色は埋葬物に匹敵するような、民俗的想像力を触発して何らかの伝承をあらしめる圧倒的な迫力を持たなかったということだろうか。

(3) 福岡県嘉穂郡桂川町寿命の王塚古墳

横穴式石室の全体に赤・黄・緑・白・黒の5色を使って騎馬人物像・鞍・盾・蕨手文・双脚輪状文・連続三角文・円文・珠文などの多彩な図文が描かれている。騎馬人物像は後室の通路によって左右に分けられた前室の奥壁に描かれており、後室に向かって左側に黒・赤・黒の3頭、右側に黒・赤の2頭が通路を隔てて向きあっている。5頭の馬はいずれも面繫・尻繫・手綱・鞍などをつけており、小さな人物が騎乗する。王塚古墳は昭和9年(1934)に発見、開口された。つまり昭和9年以前は知られていなかったはずであるが、にもかかわらず騎馬人物像に触発されたかとも思われる興味深い伝承が存在している。

桂川町寿命の王塚の山から東南にあたる場所に、杉の茂った天神様の山があります。この山は王塚の山と同じように赤土・黒土を盛り上げた大きな塚です。昔からこの天神様の山と王塚の山とから、火の玉が飛んで来るといわれています。二つの玉はぶつかりあったり離れたり上になったり下になったり、抱きあうようにも見え、おどるようにも見え、はては二つの玉が渦を巻いて飛び、尾を長くひいていくのが見られました。その物すごさに、はじめはおもしろそうに見ていた人も、だんだん恐ろしくなって目をつむり、再び目をあけてみるともう何もなくて、東の空が白んでいたそうです。この火の尾を長く引いたところから「長尾」の地名が出たとも言い伝えられています⁽³⁴⁾。

ずっと昔、この桂川村で赤児の生まれた夜に、女が二人、大川(穂波川)に洗濯に行きました。ところが不思議にも、りっぱな武士が美しい白い馬に乗り大川を西から東に渡って、王塚めがけて馳せ登っていくのが見られました。美しい白い馬のように見えたのは、馬の金銀の飾りが光っていたからでしょう。馬の通った後の空は、白布を引いたように明るくなっていました。二人の女はものも言えずにただぼんやりと立っていました。気がついてみると白馬の姿も見えず、行先も分らなくなっていました。村の人々はこの奇妙なようすを聞いて、昔から塚の西と塚の東とに「放れ駒」という名の土地があるところから、あの古墳の馬が遠乗りに出たのだらうと話しあいました⁽³⁵⁾。

ほかにも白い馬と青い馬が古墳の上空で空中戦を展開するというような伝承が存在するとかしいとか。こうした伝承が開口した昭和9年以前にも存在していたかどうかはよくわからない。だが、いずれもどこかしら騎馬人物像の特異な図文と彩色を彷彿とさせないだろうか。とりわけ後者は主要なモチーフとして馬を登場させており、騎馬人物像によって触発された可能性を感じさせるのである。それが昭和9年以降に生成した伝承であったとしても、依然として特異な図文に対する民俗的想像力の所在をしめす興味深い事例であるということではできらう。

(4) 福岡県浮羽郡浮羽町朝日の重定古墳

横穴式石室の後室右側壁や奥壁に赤と青の2色を使って鞍・鞆などの図文が描かれている。開口

した時期は早く、平田篤胤も『神字日文伝』において「筑後國石窟文字」と題した上で、「此ハ生葉郡上宮田村トイフ所ノ石窟ニ彫付アリテ神代ノ文字ト云ヒ伝フトゾ」と述べている。一方、矢野一貞は天保11年（1840）に村上量敏とともに著した『宮田石窟朱象図考』において「我筑後国生葉郡宮田村有石窟。其四窟有朱象。朱色徹石。殆成自然。蓋千年外物云。土俗以為上古文字。好古之士往々疑之。而未有能弁之者。吾輩嘗窮索之古物。而得其可証者焉。蓋朱象非文字。即上古埴輪之類也」と述べて、この図文を神代文字として解釈する所説を批判、埴輪に類するものであることを主張した。矢野の所説は今日の考古学における成果に照らしても十分な妥当性を持っていると思われるが、本稿の関心はむしろ「土俗以為上古文字」という部分にこそ向けられる。すなわち、平田や矢野の所説は当時この図文を神代文字として解釈する民俗的想像力が広汎に存在していたらしいことをしめしているのである。

（５）福岡県浮羽郡吉井町富永の珍敷塚古墳

この古墳は既に破壊されており、石室は大破して奥壁基部の巨石と右側壁の一部を残すのみである。石室の奥壁などに赤・青の２色を使って蕨手文・同心円文・靱・船・人物・鳥・ヒキガエルなどの多彩な図文が描かれている。玉利勲は「もともと石の少ない筑後平野では、ふるくから古墳の石材を石垣などに利用する風習があった、という⁽³⁶⁾」と述べた上で、こう続けている。

この古墳も、いつの日か採石のため壊されたとき、珍しい壁画のある巨石だけは、そのまま埋め戻されたのであろう。「珍敷塚」という小字名がこの地に残っていることがそれを物語っていた。すでに墳丘も石室も失なったこの古墳が「珍敷塚」と名づけられたのも、このような理由⁽³⁷⁾からである。

また、石山勲は「道路工事中に壁画が発見され、幾何学的文様を見慣れた人々にとっても、図柄が珍しがられて地名の由来となった、とも伝わる」が、「のちに埋め戻され、1950年、採土工事中に発見された⁽³⁸⁾」という経緯を報告している。この壁画が最初に発見された時期はよくわからないが、いずれにしても現地の人々が特異な図文や彩色に驚いて「珍敷塚」という名称を案出したことはまちがいないだろう。すなわち、「珍敷塚」という名称じたい特異な図文や彩色が民俗的想像力を触発した結果として生成した伝承であり、そのような過程を最も端的に表現していると考えられるのである。

（６）福岡県八女郡広川町一条の石人山古墳

横穴式石室の内部に収められた石棺の外面に同心円文・直弧文などの図文が浮彫の手法によって施されている。だが、以下に紹介する伝承は、前方後円墳のくびれた部分の中央にあって後円部に背を向けて立つ石人に関するものである。この石人は全長が1.8メートル、短甲を着用した様子をあらわしており、全面に赤い顔料が塗られている。ところが、どうしたわけか著しく原形が損なわれているのである。とりわけ顔部や胸部などの表面はひどく破損しており、かろうじて旧態をしのばせるのみである。昭和8年（1933）に福岡県が発行した『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第8輯は、当時の状況について以下のように報告している。

迷信の為に木槌にして敲打する風あるを以て、損傷甚しく、殊に面部は殆んど面目を損せり。

矢野一貞翁測定の頭部の長さ頂端より頸下端まで、一尺九寸は今や一尺六寸に減じ、面部周囲三尺八寸は三尺六寸に減げり。両眼は原形を失ひ、両耳欠損し、鼻口は共に磨滅せり⁽³⁹⁾（後略）。

「迷信の為に木槌にして敲打する風」は何を意味しているのだろうか。じつは眼病に効くということで、石人の眼部などを叩いて砕き、得られた粉末を服用することがあったらしいのである。ところで、天保3年（1832）に久留米藩の国学者であった松岡辰方が模写した絵図は、前述した石人の右手に別の石人（頭部のみ）を描いている。また、石人山古墳を記録した数種類の絵図はいずれも2体の石人を記録しているから、江戸時代に石人が少なくとも2体存在していたことはまちがいないだろう。だが、後者は今日もはや存在しない。万病に効く特効薬として全身余すところなく粉末に砕かれて、結局は人々の胃袋に収まってしまったのだろうか。

（7）熊本県山鹿市志々岐長岩の長岩横穴墓群の108号横穴墓

人物の図文が浮彫の手法によって横穴墓の外壁上部に施されているが、後世に庇を付設したためだろうか、下半身は大きく抉られている。円形の頭部は顔面の下半分が削られているが、両眼とその周辺を穿って表現している。また、両腕を伸ばして袖を短くつめた衣服を着用している。ところが、この人物は胸部が左右2ヶ所で深く抉られているのである。後世のものであるといわれているが、はたしていかなる理由があったのだろうか。庇を付設するためであったとも思われない。

筆者がこの横穴墓を現地で見学したさい、同行した考古学者は口々に「ひどいなあ、これは」といていた。筆者も似たような感想を持ったが、いかにも不審だったのは、深く抉りとられている場所が胸部の左右2ヶ所であったことである。もしかしたら何らかの伝承が存在していたのかもしれない。現地で少しばかり調査してみたら、やはりそうだった。今日でこそ廃絶してしまったようであるが、以前は乳が出ない婦人が胸部の左右2ヶ所、つまり乳房の部分の部分を削り、煎じて服用していたという。すなわち、その粉末が乳の病氣によく効くという伝承が存在していたのである。

ところで、嘉永6年（1852）に矢野一貞が著した『筑後将士軍談』は108号横穴墓を写生した絵図を収録しており、当時の状況をよく知らせている。問題の部分もしっかり描かれているから、少なくとも近世後期にこうした伝承が存在していた可能性はきわめて大きい。しかも、明和9年（1772）に森本一端が著した『肥後国誌』は、山鹿郡山鹿手永城村の条に「産塚 二ヶ所アリ鍋田村ノ條下ニ同シ」という記事を掲載している。類例はほかにもあったらしい。いずれも乳にかかわる伝承であり、あわせて特筆しておきたい。

なお、考古学的な知見を縦横に利用することで知られる漫画家の諸星大二郎は、『暗黒神話』という作品において竹原古墳・チブサン古墳・弁慶ガ穴古墳のみならず長岩横穴群にも言及しており、登場人物に108号横穴墓について「なんで胸がえぐれてるんですかね?」、「これもなにか呪術の意味があるのだろう」といわせている。かくして、諸星はこの奇妙な痕跡をも超古代史的な世界に結びつけながら、神話が現代に蘇生する過程を描き出す。その壮大な構想を荒唐無稽なものとして一笑に付すことは簡単であるが、少なくとも人物の胸が抉れていることが呪術的な意味を帯びているという推測についていえば、必ずしもまちがっていない。もちろんそれは超古代史的な世界に遡行するものというよりも、現代にも生き続ける後世の民俗的想像力に帰せられるべきものであろうが。

(8) 熊本県山鹿市城西福寺のチブサン古墳

赤・白・青で塗り分けた三角文・菱形文・円文・人物などの図文が、横穴式石室の後室奥壁に沿って設置された家形石棺の内壁をびっしり埋め尽くしている。だが、強烈な印象をもたらすのは、何といっても正面中央に2つ並べて描かれた白い同心円文である。いずれも中心に青い小円文が描かれているから、いかにも豊満な乳房か奇怪な表情を連想させる。じっさい、チブサンという名称は「乳房さん」がつづまったものであるといわれる。また、現地の人々は母乳をチチブブとも呼ぶらしいから、その名称じたいが女性の乳房を思わせる2つの同心円文に由来していたと考えられるだろう。⁽⁴²⁾

チブサン古墳は古くから「乳の神様」として信仰されていたらしい。『肥後国誌』の山鹿郡山鹿手永鍋田村の条にも、「産塚 塚ニ穴アリ其内甚タ狭シ乳味乏キ婦人此穴ニ祈テ験アリ賽ニ醴ノ香気アリ」とある。じっさい、かつては近在の人々、とりわけ乳が出ない婦人が参拝して、瓶につめた甘酒や献花を奉納していた。石室の入口部は小祠も建ち、甘酒の瓶が多数並べられていたため、⁽⁴³⁾ 醗酵して甘酸っぱい芳香を漂わせていたのである。熊本県が発行した『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』は、こうした伝承の実際について以下のように報告している。前者は大正14年(1924)に出た第2冊、後者は昭和2年(1927)に出た第4冊における報告である。

石棺の内面に接して瓶、竹筒等少なからず存在す。是れ婦人が甘酒を容れて供へたるものにして、乳に乏しき婦人、これを供へて祈願すれば靈験ありと伝へ、今なほ参拝するもの頗る多く、⁽⁴⁴⁾ かゝる現象を見るなり。チブサンなる名称と併せ考ふべき事項なりとす。

遠近の村落より常にこの古墳に参詣するもの、今も絶えず。その石室内にある石棺の奥に、一個の石あるものを乳の神と称して之に祈り、其の賽として甘酒を供ふる為に、持ち来りし竹筒、⁽⁴⁵⁾ 瓶、徳利の類、石室内一面に散乱するを見る。

こうした伝承は山鹿市教育委員会が保存施設を設置した昭和47年(1972)以降、かなり廃れてしまったが、今日でも参拝している人々を時々は見かけるといふ。産婦のみならず、牛の乳が出るよう祈願する酪農家もいるらしい。一方、チブサン古墳の西北約350メートルに存在するオブサン古墳は赤い三角連続文などが描かれた装飾古墳であるが、現地の人々に安産の神様として信仰されており、⁽⁴⁶⁾ 祭祀も存在していたらしい。以前はオブサン古墳に関しても特異な図文や彩色に触発された伝承が存在していた可能性はきわめて大きいといわなければならない。

ところが、チブサン古墳の図文を解釈してきた人々は、どうやら現地の人々ばかりでもなかったらしい。昭和30年代だったか、宇宙友好協会という団体が正面よりも右側に描かれている図文を重視して、独自の釈義を展開したという。すなわち、冠を被り両手両足を広げて立つ白い人物、およびその上方に描かれた8つの白い円文をとりあげ、空飛ぶ円盤にまつわる光景として解釈したのである。くわしい事情はよく知らないが、チブサンがアイヌ語で空飛ぶ円盤を含意しているとかいふ話もあったらしい。この団体は石室入口部にアーチを建てて、釈義を紹介する説明板も付設したという。考古学者ならばだれでも憤慨してしまう事件であろうが、やはり特異な図文や彩色が触発した民俗的想像力の変種なのだとしたら、うなずけるところがないわけでもない。問題の建築物はしばらく存続していたが、関係者が折衝して撤収させたそうである。

ところで、前述した諸星大二郎はチブサン古墳の特異な図文に触発されて比留子古墳という架空の装飾古墳を造形、稗田礼二郎という登場人物にその謎を調査させている。彼は民俗学・宗教学・古文書学などにも幅広い興味を持ち、古墳に関する新説で物議をかもした新進の考古学者であるとされる。そして、諸星はこの比留子古墳がヒルコが蠢く黄泉の国に通じる入口であったという、あまりにも異様な世界を描き出してみせたのである。⁽⁴⁷⁾もちろん架空の物語であり、その真偽を論評するような野暮は慎まなければならないが、ここにもチブサン古墳の特異な図文が民俗的想像力を触発して、何らかの伝承をあらしめていった過程の一端がしめされているといえるだろう。

④……………装飾古墳の受容史

ここで検討した事例はあくまでも本稿の関心に沿って任意に選び出したものにすぎないが、それでもある程度は民俗的想像力における装飾古墳の場所を定位することができたと思われる。とりわけ(4)～(8)は装飾古墳の特異な図文や彩色が民俗的想像力を触発した結果として生成したと考えられる事例であり、そのような過程の実際をいささかなりとも追跡することができた。

こうした関心は考古学における主要な関心に比較して、あまりにも末梢的なものとして映るかもしれない。それはあくまでも後世の所産にすぎないのだから。だが、築造年代を想定した主題群のみが、はたして絶対的な価値を持つものだろうか。装飾古墳は考古学者のみならず、民俗的想像力をも強く刺激してきた。そうだとしたら、民俗的想像力が特異な図文や彩色に触発されながら、まさしく開花していった過程の実際にしても、やはり一定の価値を持っているはずである。それは地域社会における装飾古墳の存在理由をしめしていると考えられないだろうか。玉利はいう。

いつのころか、土取り作業などによって偶然口を開いた古墳の中におずおずと入ってみた里びとが、暗い墓室の奥に奇妙な図文や絵が描かれていることに気付いたときのおどろきはただならぬものだったはずである。驚愕はやがて畏怖の想いになっていったとしても不思議ではない。装飾古墳の中に、いまも人びとの篤い信仰を集めているものが少なくないのもそのためである。⁽⁴⁸⁾

玉利はその好例として、福岡県大牟田市東萩ノ尾町の萩ノ尾古墳に関する興味深い話題を紹介している。この古墳は横穴式石室の後室奥壁に円文・同心円文・三角文・盾・船が赤1色で描かれているが、以前は内部に石の観音像が安置されていた。これは元禄5年(1692)8月に中村伊右衛門という奉行が建立したものであった。ところが、昭和36年(1961)に萩ノ尾古墳が国の史跡に指定されて観音像を移動させることが決まった以降、地元の人々が激しく反対したらしい。現在は隣接した場所に仏堂を建てて観音像を安置している。⁽⁴⁹⁾こうした顛末は人々の信仰がいかに根強いものであったのかをしめしており、同時に装飾古墳が後世における信仰の拠点として機能する可能性を持つことを知らせている。

玉利は同様の信仰を伴う装飾古墳として、奥壁に千手観音像が彫られている熊本県玉名市石貫の石貫穴観音横穴群の2号横穴墓(穴観音横穴)、今日でも数体の石仏が安置されている大分県日田市河野の穴観音古墳、そしてチブサン古墳をあげている。⁽⁵⁰⁾とりわけ穴観音横穴は「内に観音を祀るを以て穴観音と称し、土人の崇敬篤く、其の前に一堂を設けて拝殿の如くせり、(中略)入口に

は木製の棧戸を設けて妄りに出入を禁止せる」ことがあったというが、熊本県荒尾市大島区笹原の四つ山古墳⁽⁵²⁾も類例の1つとして追補することができる。『肥後国誌』はこの古墳が虚空蔵信仰を伴っていたことを記録している。こうした信仰はいずれも装飾古墳の特異な図文や彩色に対する驚愕と畏怖の賜物であったと考えられるから、前述した8件の事例とも相俟って、地域社会における装飾古墳の受容史を構想するための重要な手がかりを提供しているといえるのである。

もちろん装飾古墳の存在じたいを否定してしまいかねない極端な受容史も存在する。現地の人々が信仰上の理由によって一部を破壊してしまった石人山古墳や長岩横穴墓の108号横穴墓、人間が長らく居住していたため図文や彩色を施した石室に煤が膠着してしまった熊本県山鹿市熊入の弁慶ガ穴古墳⁽⁵³⁾などがその典型であろう。だが、筆者はこうした極端な事例についてすら、中世以降の「いまわしい破壊の歴史」⁽⁵⁴⁾をしめすものとして理解することに躊躇せざるを得ない。それも地域社会における装飾古墳の受容史に欠かせない1頁であり、後世の人々が装飾古墳をいかなるものとして解釈してきたのかを知らせていると考えるからである。

こうした関心は現代社会における装飾古墳の場所を再考するさいにも有益である。装飾古墳の受容史は今日でも新しい頁を追加することをやめていない。装飾古墳を文化財として保存すること、観光資源として活用すること、そして考古学の対象として研究することも、やはり装飾古墳の受容史における重要な1頁であると考えられないだろうか。もちろん装飾古墳を最も良好な状態で保存するべく尽力してきた数々の試みを否定することはできない。だが、考古学は民俗の想像力とも共存しながら装飾古墳を保存する方法を模索するべきであり、先行する受容史が残したさまざまな痕跡を抹消してしまうような特権的かつ超越論的な場所に立つことを回避するべきであろう。今日、考古学はけっして何よりも優先する価値を持つわけでもない。不快感を持つ考古学者もいるだろうが、むしろ本稿で検討してきたような民俗の想像力の変種であると考えた方が実情に近いかもしれない。⁽⁵⁵⁾

小山修三はカナダ北西海岸先住民の遺跡における現代的な位相を紹介しながら、「考古学者がモノや遺構を、正確に叙述しようとするのをすべて否定するわけではない」とする一方、「それは人びとの感情や社会のありかたを考慮しない狭量なもので、解釈としては民族学に分があるといえるだろう」⁽⁵⁶⁾と述べている。そして、考古学をとりまく状況が激変している状況に関して、歴史観・方法論・遺跡が持つ意味の変化という3つの視座を提出する。とりわけ遺跡が持つ意味の変化は本稿の関心にも少なからず関係していると思われるので、以下に紹介しておきたい。

遺跡は単なる学問の対象ではなく、経済価値をもっている。観光は二一世紀の産業といわれ、その重要性を増している。先住民はその経済効果に注目し、土地を取り返し、遺跡を生産の場として利用しようと動き始めている。⁽⁵⁷⁾

装飾古墳に関していえば、こうした動向は必ずしも顕在化していない。だが、小山の所説は装飾古墳の築造年代を絶対視してしまいがちであった文化財保護の理念と実践を再考して、装飾古墳の築造年代以降をも射程に収めた文化財保護の理念と実践を構想するためにも恰好の手がかりを提供している。地域社会における装飾古墳の受容史を前提した装飾古墳の民俗学は、そのような試みを実現するためにも必要不可欠であると思われる。

ところで、小林康正は民俗芸能に関して「人々は民俗芸能において様々なことをおこない、様々

な解釈を構築しているはずだが、これらは理想的芸能像を描く場合ときとして障害となる」ことを指摘した上で、「芸能史研究者の視点にとっては、現実の人々の行為や解釈は間違っ⁽⁵⁸⁾てさえいる」と述べて、その解釈学的な立場をこう説明している。

解釈学的立場がもっとも注視していくべき対象とは、従来の研究が捨象してきた、芸能を支えている個別的な場と、そこでの人々の行為や解釈なのである。この解釈学的要求は、以下の点で正当と見なせよう。つまり、民俗芸能あるいは芸能祭儀と呼ばれるものを我々が理解するに際し、それを実際おこなっている人々の認識や関心を知ることは、彼らの行為を理解する出発点となるはずである。たとえ、それらが妥当性の薄いものだったにしても、当事者がそうした認識や関心をもつという事実は依然として残るからである。したがって、解釈学的立場において出発点となる課題は、民俗芸能、芸能祭儀をそれを支える固有の文脈、すなわち、人々の行為、制度、あるいは生活様式として捉えていくことなのである。⁽⁵⁹⁾

小林の所説はあくまでも民俗芸能や芸能祭儀に関するものであったが、装飾古墳にも適応することができるはずである。かくして筆者も小林に倣って、装飾古墳が持つ「隠された意味」を追求する秘儀めいた試みよりも、むしろ後世の人々が装飾古墳に付与した意味、いわば土着の解釈学を解明する試みこそが要請されていると主張しておきたい。こうした関心はもはや考古学の領域を逸脱しているのであろうが、だからこそ装飾古墳の民俗学にも一定の存在理由を承認することができる。そして一般的にも、考古学・歴史学・民俗学が共通して対峙している文化財保護の今日的な課題に対する視座を深化させることができると考えられるのである。

平成3年3月、筆者は考古学者らとともにチブサン古墳にも出かけた。折悪しく改修工事が行なわれており、内部の壁画を見ることはできなかったが、「国指定史跡 チブサン古墳」という文字が刻まれた大きな石碑の前に薄汚れた小さな手水鉢が据えられている光景を見ることができた。今日、十二分な保護施設を得たチブサン古墳において乳の神様に対する信仰の痕跡を確認することはむずかしい。だが、美しく整備されたチブサン古墳の傍らにかりうじて残された手水鉢は、文化財保護の今日的な課題の所在を何よりも雄弁に伝えているように感じられたのである。

註

(1)——平野仁啓『古代日本人の精神構造』、未来社、1966年、288頁。

(2)——同書、291頁。

(3)——同書、291頁。

(4)——同書、309頁。

(5)——同書、307頁。

(6)——中沢新一『悪党的思考』、平凡社、1988年、62頁。

(7)——山折哲雄「グロッタの逆説」国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界 図録』、国立歴史民俗博物館／朝日新聞社、1993年、91頁。

(8)——同論文、91頁。

(9)——平野仁啓、前掲書、259頁。

(10)——橋本裕之「その後の装飾古墳」国立歴史民俗博物館編、前掲書、92頁。

(11)——清野謙次『日本考古学・人類学史』下巻、岩波書店、1955年、の第2部第8篇「古墳と迷信」を参照されたい。

(12)——同書、238頁。

(13)——同書、238頁。

(14)——同書、238頁。

(15)——斎藤忠『日本古代遺跡の研究 文献編』下、吉川弘文館、1971年、同編『日本考古学史資料集成』1（江戸時代）、吉川弘文館、1979年、参照。

(16)——大場磐雄『神道考古学論攷』、葦牙書房、1943年、の第9章「古墳と神社——多岐神社を中心として

——」を参照されたい。

(17)——同「姥塚から」『大場磐雄著作集』第3巻（原始文化論考），雄山閣出版，1977年，60頁。

(18)——同論文，61頁。

(19)——同論文，56頁。

(20)——柳田國男「民俗学上に於ける塚の価値」『定本柳田國男集』第12巻，筑摩書房，1969年，512頁。

(21)——芳賀登「地域概念の歴史の変遷」大阪歴史学会・地方史研究協議会編『地域概念の変遷』，雄山閣出版，1975年，46頁。

(22)——例外的な試みの典型として，向坂鋼二「古墳の再利用」『転機』創刊号，向坂鋼二，1985年，をあげておきたい。また，吉田富夫らは戦後の比較的早い時期に古墳が「中世の墳墓供養－民俗信仰の現われ」る場を提供していると考えて，「後世偶然の混入とかたづけず，古墳に対する中世人の観念を見直すべきではあるまいか」と述べている。吉田富夫・伊藤敬行・七原恵史「東谷第16号墳」名古屋市教育局編『守山の古墳』，名古屋市教育局，1969年，64頁。一方，犬塚康博はこうした関心を逆転させて，中世の墳墓が再利用される状況を通して古墳が存在していた可能性を類推した上で，「古墳の盛り土をきっかけとして中世墓がつくられることがあったとするならば」という興味深い仮説を提出している。犬塚康博「古墳時代」新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第1巻，名古屋市教育局，1997年，395頁。ところで，古墳と地名の関係を検討した魅力的な論文として，白石太一郎「古墳と地名（一）（二）」『歴史と地理』第448・451号，山川出版社，1992・1993年，があげられる。白石は結論として「古墳にかかわる伝説にちなんだ名称をもつ古墳は少なくないが，その大部分は古墳の本来の役割が忘れ去られた以降に生じたもので，逆に現存の口承伝承がきわめて新しい時期のものであることを示すものともいえよう」と述べて本稿の関心にも通じる視座を提出する一方，「古墳の被葬者にかかわる古墳時代の伝承が，なんらかの形で今日まで伝えられていないかなど，あまり期待しないほうがよさそうである」と述べて同業者（考古学者）に忠告している。同「古墳と地名（二）」，51頁。同業者でも何でもない筆者が執筆する本稿は，もちろん白石の結論における後者の不可能性よりも前者の可能性を展開させたものである。

(23)——こうした試みに分類することができる成果はきわめて多いが，その典型として，金関丈夫「竹原古墳奥室の壁画」『考古と古代 発掘から推理する』，法政大学

出版局，1982年，辰巳和弘「冥界への旅——「人物の窟」壁画にみる古代精神」『埴輪と絵画の古代学』，白水社，1992年，をあげておきたい。なお，対象こそ異なるが，小林康正は遠山祭と遠山伝説をとりあげながら，「隠された意味」を追求する秘儀めいた試みを批判して，土着の解釈学を解釈する二重の解釈学の可能性を強調している。すなわち，「ここで目指されるべき芸能の解釈学とは，芸能・身体所作を読み解くコードを探るといった，真に隠された意味を見いだそうとする秘儀めいたものではなく，現前の作用によって，芸能に押し付けられている，あるいは押し付けられたような意味を問題にするものなのである」というのである。小林康正「芸能の解釈学をめざして——「遠山伝説」と葛藤する解釈——」民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』，ひつじ書房，1993年，205頁。本稿も基本的にこうした視座を共有している。

(24)——考古学者の成果ということはできないだろうが，玉利勲はジャーナリストとして，こうした位相に対して一定の関心を払っており，装飾古墳にまつわる各種の伝承にも言及している。玉利勲『装飾古墳の謎』，大和書房，1987年，参照。

(25)——国立歴史民俗博物館編，前掲書。もちろんこれ以外にも，装飾古墳の考古学は数々の典型を生み出してきた。

(26)——茨城県勝田市教育委員会編『史跡虎塚古墳保存整備報告書』，茨城県勝田市教育委員会，1985年，6頁，参照。

(27)——同書，5頁。

(28)——所理喜夫・網野善彦・佐久間好雄・佐々木銀弥編『図説茨城県の歴史』，河出書房新社，1995年，56頁。

(29)——柳田國男はかつて虎という歩き巫女がいて，こうした伝説を各地に持ち伝えた可能性を指摘している。柳田國男「曾我兄弟の墳墓」『定本柳田國男集』第5巻，筑摩書房，1968年，参照。

(30)——たとえば，柳田國男は「隠れ里」という関心に沿って，碗貸伝説の諸例を紹介，検討している。柳田國男「一つ目小僧その他」『定本柳田國男集』第5巻，230－258頁，参照。

(31)——鳥居龍藏「図画の存在する常陸の二古墳 上編 船玉古墳とその壁画」関城町史編さん委員会編『関城町史』別冊史料編（関城町の遺跡），関城町史編さん委員会，1988年。

(32)——同論文，121－122頁。

(33)——同論文，122頁。

- (34)——古野日出男編『桂川町誌』，桂川町教育委員会，1967年，442頁。
- (35)——同書，442頁。
- (36)——玉利勲，前掲書，118頁。
- (37)——同書，118頁。
- (38)——石山勲「福岡県珍敷塚古墳」国立歴史民俗博物館編，前掲書，181頁。
- (39)——福岡県編『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第8輯，福岡県，1933年，18－19頁。
- (40)——同編『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯，福岡県，1937年，5－6頁。
- (41)——諸星大二郎『暗黒神話』，集英社，1988年，55頁。
- (42)——山鹿市史編纂室編『山鹿市史』上巻，山鹿市，1985年，265頁，玉利勲，前掲書，17・143頁，参照。
- (43)——山鹿市史編纂室編『山鹿市史』下巻，山鹿市，1985年，676頁，参照。
- (44)——熊本県・熊本県教育委員会編『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告（全）』，青潮社，1974年，140頁。
- (45)——同書，450－451頁。
- (46)——山鹿市史編纂室編『山鹿市史』上巻，274－277頁，参照。
- (47)——諸星大二郎『黒い探究者』『海竜祭の夜——妖怪ハンター——』，集英社，1988年，参照。装飾古墳を怪異に接続する想像力は，漫画のみならず大衆的なメディアの諸領域に遡及している。フジテレビの人気テレビ番組である『銭形平次』もその1つであり，平成3年（1991）5月29日に放映された「九尾の狐」は江戸明神協の末広稲荷の地下に赤い円文を描いた装飾古墳があり，財宝が隠されているという興味深い背景を設定している。もちろんフィクションであり，残念ながら江戸の市中に装飾古墳が存在する，もしくは存在したという話は聞いたことがないが。
- (48)——玉利勲，前掲書，16頁。
- (49)——同書，16頁，乙益重隆「熊本県下における装飾古墳の発見と研究の歴史」熊本県教育委員会編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』，熊本県教育委員会，1984年，363頁，参照。
- (50)——玉利勲，前掲書，17頁，参照。
- (51)——熊本県・熊本県教育委員会編，前掲書，435頁。この穴観音じたいは平安初期に作成されたと推測することができるという。同書，478－480頁，参照。
- (52)——三島裕「四ツ山古墳」熊本県教育委員会編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』，11頁，参照。
- (53)——山鹿市史編纂室編『山鹿市史』上巻，273頁，参照。
- (54)——斎藤忠『日本考古学史の展開』，学生社，1990年，399頁。
- (55)——こうした事態は考古学のみならず，歴史学や民俗学の領域にも深く関係しており，緊急に検討しなければならない問題を内在している。たとえば，筆者は現代社会における民俗芸能の場所を再考して，民俗芸能を伝統文化・地域文化として保存，活用することを定めた文化財保護法と民俗芸能を観光資源として活用することを奨励する通称おまつり法をとりあげながら，民俗芸能が近年もはや学問的な価値のみならず多種多様な社会的な価値を付与されていることを強調している。問題は民俗芸能が再創造されていく過程を通して，我々が民俗芸能を再想像する手がかりを得ることであり，装飾古墳の考古学にも同様の問題がつきつけられているということであろう。橋本裕之「民俗芸能の再創造と再想像－民俗芸能に係る行政の多様化を通して－」香月洋一郎・赤田光男編『講座日本の民俗学』10（民俗研究の課題），印刷中，雄山閣出版，参照。
- (56)——小山修三「遺跡の民族学——カナダ北西先住民」『季刊民族学』76号，千里文化財団，1996年，18頁。
- (57)——同論文，19頁。
- (58)——小林康正，前掲論文，157頁。
- (59)——同論文，157頁。

〔付記〕

本稿は国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界 図録』（国立歴史民俗博物館／朝日新聞社，1993年）に収録されたコラム「その後の装飾古墳」の着想を發展させて，論文として新しく作成したものである。本稿を執筆するさいは，石井聖子・石山勲・犬塚康博・小林康正・設楽博己・白石太一郎・高木正文・春成秀爾・山本光正（50音順）の諸氏にお願いして，筆者の着想を聞いていただいた上で，関連する資料や情報を提供していただいた。諸氏の多大なご教示およびご協力がなければ，考古学の領域に通じているわけでも何でもない筆者が本稿を完成させることは到底不可能であった。深く謝意を表したい。また私事にわたってしまうが，幼少期を大阪府藤井寺市国府の国府遺跡や允恭天皇陵のすぐ近くですごした筆者は，人骨の屈葬が発掘された現場を見て強い衝撃を受け，近隣に散在する数多くの古墳に出かけたり石川べりで土器を見つけたりして，その記録を作成することに熱中したものである。こうした体験を持つ筆者にとっ

て、考古学に少しでも関係する論文を執筆する機会を得たことは大きな喜びであった。残念ながら考古学を専攻するという夢こそ実現しなかったが、当時の体験は本稿の関心にも反映しているはずである。「装飾古墳の世界」

展示プロジェクト委員会に参加して数多くの装飾古墳を見学する機会のみならず、装飾古墳について論文を執筆するという稀有な機会をも提供してくださった白石氏に対して、あらためて深く謝意を表したい。

(千葉大学文学部，元国立歴史民俗博物館民俗研究部)

Folklore of the Kofun Period Decorated Tombs

HASHIMOTO Hiroyuki

How did people perceive and interpret the earlier Kofun Period burial mounds? In order to get an idea of how folk imagination worked concerning decorated tombs, I discuss several oral traditions related to the decorated tombs. Since the burial mounds are visible above the ground unlike most other archaeological sites, which are buried underground, they have managed to maintain and renew their *raison d'être* over the centuries. Indeed, several Kofun Period burial mounds are still objects of local worship. In particular, decorated tombs with unusual signs and pictorial representations sometimes in color seem to have served as a means for people to stimulate and develop their imagination.

In this paper, I discuss various oral traditions related to the Torazuka, Funatama, Ōtsuka, Shigesada, Mezurashizuka, Sekijinyama, Nagaiwa No. 108, and Chibusan tombs. I focus on the kind of places these tombs have occupied in people's imagination and mind.

This kind of study has been considered marginal in Japanese archaeology, but it is in fact highly relevant to archaeological heritage management. It gives us a clue to understanding how and why archaeological sites such as decorated tombs have been protected. It also helps us put these archaeological sites into the context of contemporary society.